

労働者階級は、
三無ファシズム解体の
全人民的共同行動を湧き起こし、
社会主義文明で、

全国全戦線をおおいつくせ！

“社会主義の人間像”とは何か

マルクス主義青年同盟

目次

一、社会主義と戦争

——現代世界の基本問題

1

二、共産主義運動の現状と任務

4

三、現情勢における全人民の共同任務

7

四、社会主義的生産と所有の本質

——さしせまる転向・挫折文明の破局、それをいかに廃絶するか？

9

五、党史・共産主義運動の歴史的統合と

「社会主義陣営」の構築のために！

12

一、社会主義と戦争——現代世界の基本問題

労働者の同志諸君ノ 勞苦人民、青年諸君ノ

疑いもなく人類は、かつてこれまで経験したことの無い、見たことも聞いたことも無いような形態の闘争が必要とされる事態に直面している。否、人間は自分自身の手でその環境をつくりあげてきたのである。

かつて中世の「魔女狩り」のように、このような時に、最も愚かで、頑迷で、老朽し、これから死にゆく勢力や頭脳は、己の危機意識にかられ、ただおそろしげな「魔性の敵」「諸悪の根源」をでっちあげなければ事態の進行を説明できず、危機に便乗して一旗上げようという見えすいた目的をうまく隠しおおすこともできず、「悪魔のおはらい」でも始めるかのように、例の「ソ連脅威論」「軍備増強論」をしわがれた声でふれまわって、中世のアヘン神父供よりもさらに程度のおちる低能ぶりをさらけ出しては肩をたたき合つて励まし合い喜び合うという、いとも奇妙な一場の笑劇を演じているのである。事態をこれほど単純化できるとは、そしてそれで満足し、意気な上げることができるとは、幸せこの上ない人たちだと、少し知恵のついてきた三無の民が、一種とまどい

ながらこの幕間狂言をながめている。

まさに、全文明史の岐路、全理性の分岐点、全戦史の総決算場にわれわれは立っている。その序幕は、ここ数年間、世界いたるところで——中東で、アジアで、社会主義国同士の間で、「社会主義圏」内部で、そして、それにひきずられるようにして、ヨーロッパで、アメリカで、また最も二無平和ボケした日本でも、演じられてきている。「世相」は、「狂乱狂気の時代」とさえいわれ、青年と老年との間の歴史的断絶は、想像を絶し、老人は今の若者を見てみるとまるで、宇宙人かなにかを見ているのではないかという錯覚におそわれるという。

現代世界を正しく認識し、理解すること——つまり現代世界を動かしている基本的力と対立、その本質問題の性格を正しく理解することは、人間の理性にとつての根本的試金石であり、人間の理性と行動力の根本的更新の基礎となっている。

この点でわれわれが日常目撃しているのは、はてしない混乱、混迷、混沌である。かつての平時の理性や知性は沈黙したままであり、いかがわしい一旗組が巾をきかせ、平時の理性組は、一部自

民党・政府関係の、中世的封建的・反動的言辭を介して、最低自分は、そのような見地にはくみしたくないと自信なげに、不安げに抗議の声をあげるのがようやくである。一方で、多くの人は、この数年間、この点においての思考を停止し、従来の基準ではおしはかれないことはわかったが、では、新たな正しい基準を聞いたことはしばしばあきらめて、そのうちはつきりしてくるだろうと、あるがままの事態をただうつつりゆく情景として無思考状態でうけいれてきたのである。できるのはせいぜいまゆをひそめたり、酒のサカナの種にするにとぐらいであるかのように、そして、ここから「イデオロギーの終焉」「理性の無力」が言われ、一部の転向・御用学者にとつては、己の理性活動の破産をとりつくり、弁護するのにかっこうの時代状況となったかのように見えたのであった。

だが、終末と破局を迎えているのは、人間の理性の力ではなくて、現代世界の総体を、正しく、冷静に、歴史創造の見地から評価することのできない、現状を改革することのできない、民衆に理性の更新を問うことのできない、あわれなお追従の論議と現状追従の転向・挫折の文明にほかなら

ないことが、近来、ますます明るみにでている。

では、何故に、多くの人々（かつての「革新的理性」の人々も含めて）は、この数年来、現代世界の諸対立を正面から扱い、評価することを避けてきたのであるのか。それと、「社会主義の輝やかなしいイメージが崩れた」とか「社会主義は既に人間社会の目標ではなくなった」とかと一部で言われることとの間には何か関連があるのかどうか。まさにここには、社会主義をあしきまにのりし、そうすることであると旧世界に民衆をつなぎとめておこうとする資本帝国主義者のけがらわしい意図には最低くみしてはならない、しかし現代の社会主義諸勢力の現状を見ればそれ以上のことはわからないといった、きわめて自己防衛主義的な社会主義への接近と、そしてその思考方法そのものを否定せざるをえない、いわば新たな飛躍のための二無的私的「葛藤」の社会的表現が示されているのである。

現代世界を覆う戦争の波、そして、社会主義と戦争、この問題、この関係をどのように理解し、評価するのかをめぐって、あらゆる「理性」は二分される。

戦争とは何か。戦争とは、諸国家が、資源を獲得するため、市場を争奪するため、領土を拡張し自国の権益を守り、あるいは拡大するためにあいつ争う闘争である——これが従来の「通説」であった。そして、疑いもなく、このような性格の抗争

が世界の一部で、おさえがたく増大している。アメリカ—E.C.—日本という「西側先進国」の各経済的資本勢力は、その内部でいちじるしい規模の対立をかかえ、貿易戦争やら、市場戦争やらを展開しながら、一方では、「神聖なる」反共同盟や反ソ同盟を結んで、相互にもたれあい、寄りかかっている。あいながらなんとか資本主義の終末だけは避けようと、必死の形相でその対応策に日夜頭を悩ませ続けている。

資本帝国主義の思想的代弁人たちは、この通説の尺度で、現代世界の全問題をおしはかり、またそれでしかおしはかることができないために、ますます泥沼のごとき無力の上ぬりをやっている。

イラン—イラク戦争をこの尺度でおしはかれば、どうなるか。それは石油資源と領土問題をめぐる衝突であり、背後には米・ソの影がある——しかしそれは湾岸諸国の主導権争いの戦争である——しかり。それは、イスラム教内部の宗派戦争である——しかり。それは、まさにしかり。だが、この決着が、この尺度に沿った型でなされると断言できるものは誰ひとりとしていず、さらに諸大国が収拾の主導権をとれると考えているものはひとりとしておらず、どのような結果になろうと、大得をしたという大国、列強は一つもなく、逆に結論は、諸大国の政治的影響力のさらなる低下以外の何もでもないということだけは、誰もが認めているのである。

そしてこの尺度を、かの中国—ベトナム戦争のような型の戦争にあてはめてみれば、さらに奇っ怪なことに、すべては不可知きわまりないことになるではないか。領土は、資源は、市場は、労働力は——まさにその所有と帰属は、一つとして動いておらず、いったい、何が起り、何が変わり、誰が利益を得たのか、旧来の尺度や通説では、何ひとつとして理解できないのである。そこで彼らはつぶやく、これは無益な、不毛な戦争だったんだ、内ゲバ戦争、インドシナでの主導権争いの戦争だったんだ……そうだ、そうしておこう、これを逆に反共宣伝に使おう。民衆のみなさん、社会主義とは恐ろしいところです。仲間同士の内ゲバです、社会主義は平和勢力であり、戦争はやらないという神話は崩れました。社会主義に望みを託すのはもうやめましょう」と。

だがあまりにも明確なことは、このような型の戦争に対しては、資本主義諸国家やその指導者は何ひとつ、介入も調停もできないどころか、ただ呆然とあつげにとられて、なすすべもなく、遠くで立ちつくしていることしかできないということ、そして事が終わってから、ようやく物知りぶった解説やら、理性ぶった批評やらがで、それをあげつらつて、昨日まではただオロオロするしかなく、かつたオノレの姿をおし隠すように虚勢をはり、そしておち、おきまりの社会主義悪論、資本主義弁護論のくりかえしにいきつくしかなないのであ

る。

そしてこれこそが、戦後二十五年間の、資本帝國主義国家とその政治指導者や支配政党の眞の姿だったのである。「一枚岩」の社会主義陣営の分解——中ソの分裂、中越の分裂、中朝越の離反、社会主義諸国の多様な分解と分裂、そして非同盟諸国の大分解——こういったことで息をつぎ、この分裂状態をあげつらい、その間を渡り歩いて、調停者ぶったり、その間で寄食的利益をあげるといふ以外に、戦後彼らの延命の道があつたであらうか。そして常にこの分解と論争のあとを追ひ、この内部闘争には手出しも、口出しもできずにたちすくみながら、この矛盾、不和をついで、己の生きのびる道をさがし求めるといふ、いわばライオンのたて髪で変装し、ライオンぶつたハイエナの如きものが彼らの本性であるといつて、いったいなんびとが自信をもつて否定することができようか！

人民諸君！

事態の進行は、次のことをますます明るみにだしている。

現代世界には、二つの型の戦争、二つの根本的に異なつた性格の戦争がある、と。

一つは、まさに民衆を、人類を際限のない餓鬼道にひきずりもどす資本家諸君の略奪的目的と排他的権益のための戦争、諸国民の分裂と憎み合いと排外的相互反発の上に立ち、これに寄食し、こ

れを固定化することによつてのみ資本家的利潤を上げられるという限られた地域や資源を強者の論理にしたがつて再分割するための戦争。

今一つは、多くの人が一時不可知になつたが、従来の略奪的餓鬼道的戦争とはまったく異なつた型の、その歴史を創造し、人類の未来を築くための方法、そのやり方をめぐつて、その理性の形式や政治目的の相違をめぐつて争われ、この対立や敵対をより高度な段階で結合するための——前者が互いを憎み合い、けおとし合う戦争であつたとすれば、それとは異なつた、互いを結局は高め合ひ、交歓し、止揚していかざるをえないような型の戦争（社会主義の協奏競合戦争）である。

うそだ、そんなばかなことがあるはずがないて？！ まさに戦争といへば、法外な空文句や口先の美辞麗句や民族的スローガンの陰に隠れた搾取者のための略奪戦争であるといふものしか知らないような人々、その文明を決して越えようとしな人々、オレの食いが減つたのは、アイツが余計に石油をとつたからだ、オレの職がなくなつたのは、ヤツが自動車を作りすぎたからだといふ風にしか政治—経済—社会というものを見れない人々、そしてそのような無知に訴えてしか危機にひんした国家統治を延命させることができないような人々——いざ戦時になつた時には、つまるところ、もつとオレのとり分をよこせとしてしか反応できないという、この帝國主義制度までの数千年

の搾取社会が生んだ無知と餓死の恐怖の規律、そのくされ、さびついた餓鬼道的鉄鎖のくびきそのものから、全人類を解放するための主体勢力を高め上げ、統合するための激しい、だがそこ以外からはいかなる意味でも、新たな活力と活路をくみとることのできないという闘争が現代共産主義運動と社会主義建國の歴史的苦闘として全面展開され、そして旧世界の腐朽的指導者と政党は、ただ恐れおののいてこのゆくえを盗み見ながら、結局はこの闘争のゆくえによつて、己の運命を支配されていかざるをえないのだということを、結局バカをみるのはいつもオレたち民衆だ、という、

そういった性格の戦争しか知らないところから物事を見るのではなく、民衆自身を歴史の主人公にかえ、国家統治の主体者へとする苦闘をうけてたつための闘争が今や眞に必要とされてきているのだということを自覚した労働者は、すべての労苦大衆に、正しく、確信をもつて、冷静に理解させていかなければならない。見たまえ、なぜブルジョア諸君は「北京の内部抗争」だの「クレムリンの権力闘争」だの共産党の指導部間の闘争だのに、あれほどの執着と一喜一憂ぶりを示すのか、そして、なぜあれほど「中ソ再和解」や「社会主義諸国家の再統合」を恐れているのか、さらに、イラシーイラク戦争のような型の「小国間」戦争にさえ、大国はどのような影響力も行使できず、この大国の国民は一言「とにかく戦争はいけない」と

かいいながらも、この膨大なぶつかり合いのエネルギーからますますはじきとばされていく己を見て、一様に深い無力感におそわれざるをえないのか！

人民諸君！

歴史創造の闘いに困難と一時的失敗は避けられず、どんなにすばらしい事業も、一度でなんの苦闘もなく成功したというためにはどこにもなく、しかも社会主義のための闘いといえば、資本主義までの欲得づくの文明を地盤にして出発するゆえ、その道はきわめてけわしく、一進一退の道のみであるが、しかし、この歴史創造の闘いの困難や失敗を見て、それみたことか、そんなことはやるほうがバカというものだといった、一切の転向・挫折、闘わずしての背教・敗北主義を、結局は焼きつくし、そのようなオロカな老成ぶりを軽蔑し、

二、共産主義運動の現状と任務

労働者の同志諸君！ 労苦人民、青年諸君！

では戦後三十五年、全世界の共産主義者(政党)と社会主義勢力(国)は、なんのために闘い、何をめぐってあい争ってきたのだろうか。

一、でもみたように、これに対しては通例、主導権争いのためだとか、国際主義を標榜する共産

これを廃絶しながら、己をうちきたえ、より高度な立派なやり方をさがしだし、窮極のところ全世界を獲得していくであろう！

社会主義と資本主義では、あらゆる矛盾や対立や敵対的關係といったものを解決するさいの方法が根本的に違ふのであり、この差異を見ずしては、現代世界の全基本問題は正しく理解することも評価することも、したがってそこから戦時の人間的理性や行動力をくみとつてくることもできないというものこそ、現情勢の最大の特徴なのである。

人民諸君！

一度動き始めた歴史は決して逆もどりさせることはできない。一度うちたてられた社会主義の権威と統合力は、一時どんな困難にみまわれ、どんな形態変化をこおむり、そうすることで一部の人間から『失望組』が出たとしても、それは、かえつ

て頼りにならない投機的な随伴者を見きわめるための試練のようなものであつて、それを永遠に、地に落ちたままの状態で置いておくことは誰にもできない。

未来を切り開くために苦闘し、飛躍せんとする社会主義と、寄生し、生命力を失い、不毛化し、もたれあい、民衆を略奪文明におとしこめておくことではか生きながらえることのできない資本主義、これこそが現代世界の根本的対立にほかならないのである！

帝国主義的好戦主義者たちに対しては、ただ弱々しい論議の声をあげるだけでなく、歴史創造の主人公となるための闘い、社会主義建国のための正義の戦場へと勇躍赴くことこそがわれわれ人民の唯一の回答であろう！！

主義も、国家利害や民族対立を優先せざるをえないのだとか、はては近親憎悪とかいったわけ知りぶつた言葉で説明される。まさに理性なき政党や評論家、学者諸君の水準とは、これ以外のなものでもないのである。

共産主義者はこのような低文明をなくすために、

——そう、腐朽し、死滅しつつある資本主義を死滅させざるための方法、やり方、道、手段をめぐって論争し、分裂し、そして諸国民を、あらゆる帝国主義的鉄鎖から解放して、社会主義へと移行させるための、その歴史創造の能力を民衆の中にうちたてるための方法、やり方、道、手段とは何

かをめぐる模索し、闘い、批判をかわし、分歧し、論争し、いろいろな「紛争」を起こしてきたのである。

これは「不毛な分裂」ではなかったか??

この分裂のおかげで反共宣伝が勢いづき、アメリカ等々の帝国主義国がこの分裂に乗じて延命し、ボナパツてきたではないか、この分裂さえなければ、社会主義はもつと順調に発展したであろうし、オレもこんなに傷つかずともすんだのではないかって?!

まさに世のたとえ通り、何もしない人々には、誤りを犯すおそれもなければ、困難に出会う心配もないかわりに、新たな事態に直面し、それに応じた新たな解決方法をさがしだす途上で生じた意見の相違を、かつてとは様相も面目も一新した高度な団結形態へのぼりつめることで正しく解決するという、生産者、創造者の陣営と、やり方にとつては局外者でとどまる以外はない。そして戦後—スターリン死後の共産主義運動とは、このような見地、つくられた権威と環境に安住し、できあいの機構に寄食をして目先の利害を追い求めるという思潮を、共産主義内部から一掃するための闘争でもあったのである。

問題なのは、この分裂を、なければよかったものとして描くことではなく、この分裂、この分解と再編と統合の全歴史過程を、共産主義者でない人々にも、多くの人民諸君にも正しく説明し、

理解させ、そのことを通じて、この現実の生きた発展過程を通じて現代共産主義と現代社会主義国家建設の現状とその核心問題を正しく理解させることなのである。この点では、ブルジョア諸君の方がはるかに大きな仕事をしており、共産主義内部の諸問題に対しては、共産主義や社会主義を自称する人々よりもはるかに多くのことを普通の民衆に向かつて「わかりよく」(彼らの反共的目的と見地によつて)語っているのである。社会主義を自称する共産党や社会党は、これに対しては顔をゆがませたり、不幸な分裂だとか、わが党はこれとは別だとか、デマだとか、反共宣伝だとかとしてしか、きわめて自己防衛主義的にしか対応できないのが習慣となつている。これはまったくばかげたことではないか。ブルジョア諸君が反共宣伝をやるならば、われわれはもつともつと、うまく大量に共産主義の宣伝をしようではないか? スターリンは死の直前に言った。社会主義国と帝国主義国との間の矛盾・対立は、帝国主義同士との矛盾・対立よりも、強く大きいというのは理論的にはその通りであるが、現実には、帝国主義同士の競争や対立の方がより大きい。帝国主義とは戦争であり、社会主義と平和勢力が強くなつたらといつて、この法則をなくすことはできず、そのためには帝国主義そのものを絶滅しなければならぬ。

毛沢東はうけついで言った。帝国主義は共産主

義との対立を口実にして彼ら内部の矛盾をおし隠しており、われわれは、彼ら内部の矛盾を利用することができると。問題は帝国主義をうち破るために、全世界人民を歴史創造の主人公に、革命の主体者へと高め上げることであり、そのために帝国主義のあらゆる攻撃と矛盾を利用せよ、この闘いを恐れ、キンタマをちぢみあがらせているのが、ソ連を筆頭とする現代修正主義である、と。

だがスターリンは、かのスターリン批判をもつて墓をあげられ、毛沢東も同じように「再評価」の波にさらされているではないかって?! まさにその通り、共産主義者は、己の地位や名譽や名声や人気を高めるために闘うのではない。共産主義の最高指導者たちと、他の人々、被指導大衆との間の差異、断絶は余りにも大きく、それは一挙にうめることはできず、全国民が同じように一挙に純粹に社会主義の側に移行することはできず、そのためには、一定の歴史的闘争過程が必要であり、そのために、国家や政府の役割を正しく規定し、使い、利用することができなければならぬ。そして、一連の歴史的教訓からしてきわめて明確なことは、この移行にさいしては、かの林彪・四人組的な、資本主義に対する封建的家父長的軍閥的立場からの批判者や陰謀家、いかかわしい投機者や左翼小兒病的反発者、資本主義に対する小農・ルンペン的ウラミ・ツラミや私営的コンプレックスで騒動をおこすような人々に迎合し、彼らをもち上げ、

彼らを帝国主義打倒・修正主義打倒の主体勢力にして（したがって、もちろん彼らを社会主義革命から排斥し、除外するというのではない）、そのような道を通って全国民を社会主義に到達させることはいかなる偉大な指導者がいようとでもできず、また彼らをも、誤った立場から解放して、歴史創造の主体者へと改造し、高め上げ、革命の指導階級を生みだし、全国民を社会主義に向かつて歩ませていくには、これとは違つた別の道、やはり方、経路を通つてこなければならぬということなのである。

共産主義の指導者たちは言うであろう。

労働者人民諸君、プロレタリアートが権力を握り、これを手ばなさないかぎり、人民を国家統治の主人公に高め上げるといふ闘争を忘れない限り、資本主義を恐れる必要はない。帝国主義の本性たる国家独占資本主義を恐れることはない。見たまえ、自民党のようなブルジョア政党的指導者たちを、彼らはなんとまよく巧妙に、己の政治的支配を維持し、強化するために、国家機構を使い、官僚を動かして、資本主義の商取引きの習慣を巧みに利用して金をとりこみ、その資金をきわめてうまくばらまいては己の支配圏を拡張していつていてではないか。彼らは国家に従属したりせずに、己の政治目的と経済的本性に依じて、そのために国家機構をとりこみ、利用し、かなり高度にそれを組織し、動かしているではないか。われわれが自

分たちの目的を見失わないかぎり、これを見きわめ、このやり方を「学び」「利用する」ことを大衆に教え、これを介して、従来の国家に対する隷属者としての偏見から大衆をぬけ出させ、社会主義へと近づけ、歩ませていくことができるであろう。そしてブルジョア政党的のやり口をつぶさに見現代の国家統治の「秘密」をより深く知るならば、労働者人民がこう言うであろう。われわれならば、もつとまよくやれるんだが」と。

人民諸君、

共産主義政党的とは、戦時になればなるほど、国家というものをこのように扱つていく人々のことである。帝国主義的略奪的戦争とは、その真の目的をおし隠すために、「国のため」「国家の利益をかけて」と常に虚飾色の衣裳をまとう。その本質は、被指導大衆が、国家という問題につきあつた時に、つまるところ、長い間の被統治者としての習慣——「国家」に隷属することは知つていても、国家（機構）の上に立ち、これを（政党的）最高の組織形態を通じて（己の目的の下に従わせ、使用するといふことなどは一度たりとも考えたこともなければ、その生活と理性の限界を決して自分から越えようとしないという、国家の問題に対する無知と低文明の上に奇食し、そこに国民をつなぎとめておくことによつてのみ可能となるものなのである。

労働者人民諸君、

そして今問題となつてゐるのは、現在の自国政府——自民党内閣、鈴木「越憲」——三無ファシズム培養内閣とは、いったいなにもものなのかという問題、現代世界のきわめて特異で、高度で、本質的な闘争と政治問題に対する正しい立場に国民を導くことができないのはいふまでもなく、それに対する正しい理解と評価を下すことを恐れ、略奪的革命的餓鬼道的排外主義の側に国民をとどめておく以外には、その土にそびえ立ち、ポナパル以外には、世界危機に対していかなる対応策ももちえないような、そのような階級的政党的性格の政党的であるといふこと、したがって、この政府を、別の革命的な性格の政府にとつてかえるといふことを恐れて、戦争に備えよう、軍備を増強しよう、憲法を改正しよう、大國らしい軍事力をつけようといふ見地とは、今日の戦争と革命の嵐の中にもくずと化すために出ていくような無益な自殺行為を奨励するものであるか、あるいはまた、対馬海峡や津軽海峡でソ連海軍の動きを牽制する力ぐらいはもちたい、その分アメリカの肩代わりをして、日米経済戦争での発言力を強めたいといふケチな目的をおし隠す大言壮語以外のなものでもないのである。

まさに戦争と革命の問題とは、自国政府に対する態度の問題であり、あらゆる階級勢力、政治勢力の動向は、一点、この国家と政府の問題をめぐつて揺れ動き、誰が、どの階級が、どんなやり方

で、なんのために、どこに向かつて、国家を動か
し、それを通じて国民を組織していくのかをめぐ
る大分解と大再編と大統合のルツボをめざして、
集中され、吸引されていくのである。

三、現情勢における全人民の共同任務

労働者の同志諸君ノ 勞苦人民、青年諸君ノ

このような情勢下における全人民の共同任務と
はなんだろうか？

現在の政府を、別の革命的政府にとつてかえる
というようなことは、あまりにも漠然としており、
あまりにも将来一般の話であり、今すぐはとても
無理なのはつきりしており、当面は少しでも悪
い方にならないようにするのがせい一杯なのでは
ないか？ 共産主義者の言うことは、いつも理想
論としては正しいが、現実的には実現不可能なこ
とばかり言っているのではないか？ 民社党や公
明党が「現実主義路線」をとつて自民党と連合し
ていこうというのもこれはまたこれでしかたのな
いことだし、一方共産党が、それではダメだ、悪
くなる一方だ、より国民のための政策をと主張し
ているのも、それはそれで一貫した姿勢であるう
し、その間で社会党が動揺するのも当然のことでは
はないのか？ 野党にはなにもまだ統治能力がな
いからね、と。

まさに「しかたのないこと」であり、「当然の

こと」である。国家・政府という問題になると、

「現実」という名におしきられ、「統治能力」と
いう言葉におしきられ、最後はよくてタクシーや
床屋や一杯飲み屋や喫茶店あたりでよく出る風刺
的政治評論でオチをつけてお茶をにごすというの
が、「普通の」大衆の習慣である。そしてそれを
見て、善意ぶつた政治家やジャーナリストが、さ
すが国民の目は肥えている、大衆はよく見ていま
すよ、庶民をだまし通すことなんかできませんよ
と、少し「国民」や「大衆」や「庶民」の自尊心
をくすぐつてやるといのが、おきまりの情景で
ある。

政党の性格は、その口先によつてではなく、ど
のような政府をつくらうとするのかによつて決定
される。だから民社党や公明党がよく、共産主義
には人間性がない、われわれは人間性社会主義だ
とかいう彼らの人間性とは、現在の自民党政府の
人間性を至上のものとし、諸国民を敵対させる帝
国主義的鐵鬼道的戦争を支持する人間性であり、
彼らの唱える「福祉社会」とは、この戦争のため

の軍備を増強し、国民福祉を切り捨てることを美
徳とする社会だったわけである。

そこで共産主義者は何を言っているのか。

われわれは、「共産主義語」と普通の人々の「政
治的慣用語」とを近づかせ、結びつかせ、共通
の言葉、共通の文明をもつように努力しなければ
ならない。

共産主義者が言っていることは、今すぐ自民党
政権をうちたおして革命政府をうちたてよ、そう
でなければすべては無である、ということなので
はなく（そんなことは三才の子供でもバカげたこ
とであるというのを知っている、今すぐ、ただち
に、そして継続的に現在の政府、現在のブルジョ
ア独裁権力の基礎を掘り崩し、解体する仕事にと
りかかれ、この中で、社会主義建國にすべての国
民大衆を導き入れていくことのできるプロレタリ
ア権力の基礎とその諸能力を闘いとするための仕事
に、すべての人民大衆の中でとりかかれ、それを
指導し組織する政党を支持し、強化せよ、そのた
めの社会運動を今すぐただちに培養し、促進し、

激化させ、拡張し、發展させよ、ということを書き張っているのである。

国家、政府、政党には、必ずその社会的基礎があり、それが彼らを支えているのであり、社会を変えようというとき、国家をかえ、政府を別のものにとつてかえるということは、その基礎を革新し、大衆の理性と生活の更新と革命化を組織し促進し、そしてその中で、諸階級を統治し、改造することのできる指導階級の能力を闘いとり、すべての人民勢力の団結形態、統一の組織形態を現実の生きた闘争と交流の中でつくりあげ、それをきたるべき人民政府の基礎と形態としてはぐくみ、育てあげていくことを意味するのである。

そして今や政府・自民党とは、農村も含めて、独占資本家階級を除いた国民諸勢力の中のどれに対しても深く根をはり、その基礎の上に立っているのではなく、反対に、諸階級の分解と分裂と動揺の上にボナパリ、綱渡りのにそびえ立ち、寄食をじているにしかすぎないものへと転化しているのである。それが、先のダブル選挙の結果だったのであり、それを今、自民党自らが一番よく知っているがゆえに、危機の時代の新たな「分配の論理と方法」を求めて、あれほど熱心に政策を研究し、さらになによりも選挙制度の改革（小選挙区制の導入等々の改悪）にあれほど執着し、目を血走らせてその実現のために奔走し始めているのであり、また国会で過半数を占めているにもかか

わらず、反共中道の助力がきわめて必要になってきているのである。

人民諸君！

国内の階級情勢が、このようなものになってきたからこそ、われわれは今、現在の自国政府の基礎を解体し、新たな国家統治階級を生み出す仕事にとりかかれと自らの戦術を決定し、共産主義的前衛活動の社会化と、前衛に指導される社会運動の全国民化（マル青同的前衛活動の社会化とマル青同的社会運動の全国民化）という方針をおしすすめることができるのである。

労働者諸君！

近年のあらゆる闘争が示しているように、共産主義・社会主義内部の問題、そして共産主義と結びついているかぎりにおいてあらゆる人民勢力内部の問題に、帝国主義者、支配権力は、われわれに先んじてこの問題をとりあげ、これに介入し、これを破壊しつくすことは結局はできないのだということが明確となった。それが真剣なものであるほど、高度な形態をとればとるほど、社会主義協奏競争止揚運動の前では、彼らはまず、ただたちすくむことしかできないのだということが明確となった。彼らはただ、この闘争の不徹底や、われわれ自身の失敗を待ち、この失敗に乗じて革命の破壊を試みてみる以外には、いかなる意味でも「当事者能力」がないのだということが世界的規模で明確となった。

だから、まずは、彼らとわれわれとの間に明確な境界線を引いておくことが必要である。そして、帝国主義的略奪的文明しかもっていない階級、現在の政府を握り、国家権力を握っている階級、政党の自由を徹底して制限し、規制し、監督し、彼らの手をしばり、そしてこの中で人民の文明の水準を、理性と行動力の水準を不断に高め、労苦大衆を国家に対する偏見、排外的祖国防衛主義のくびきから離脱させ、歴史創造の主人公へと高めあげる団結形態を協奏競争的な革命的な社会運動、大衆行動として闘いとり、發展させていくことが必要である。これこそが、当面するわれわれの革命的な政策なのであり、人民の共同任務にほかならない。

共産党は今、軍事費を削り、くらしと福祉、教育の充実をめざす国民的大運動を唱えている。はたしてこの要求、この運動は、ここにいる革命的な社会運動、大衆行動たりうるだろうか？ しかり、もし真の共産主義の見地、ここに述べた革命的な政策の見地と結びつき、そこから正しく説明されつくすならば、従来通りのあいも変わらず失敗するにきまつているお願いの運動と手を切るならば、それは社会主義建国革命闘争の側に労苦大衆を一步近づけさせる中間駅となることができるであろう。

なぜならば、軍事費を削ることは、帝国主義者、独占資本家階級、政府・自民党の手をしばり、彼

らの反動的策動の経済的—政治的—軍事的源泉を統制することだからであり、くらしと福祉・教育の充実をめざすとは、人民大衆の理性と行動力を高め上げるための物質的条件を拡張することになるからである。そして人民諸君に、この境界、この枠の中で、社会主義協奏競合運動を展開し、人民運動の抑止・寸断、分裂・分断状況に終止符をうとうという政治的枠と形式を示し、与えることができるからである。われわれは、今の共産党そのものの中から、何かしら歴史創造の革命的なものが生まれてくるものではないということをよく知っている（それは彼ら自身も認めている通りである）諸勢力の独特な組み合わせによつて生じてきたきわめて特異な現情勢の相互関係そのものの中から生まれてくるあらゆる自然発生的な革命的気分を、きわめて急速に、かつ巧みに発酵させて

いくことを心得なければならぬのである。そしてこのような要求に対して、今一つ別の角度からなされる——つまり国際情勢の評価から出されてくる「素朴な」疑問、つまり、いろいろな外圧危機論、ソ連脅威論に対して——軍事費を削るというのは理想論だが、現実にはソ連の脅威はどうするのといった声に対して、歴史総体の歩みからこうこたえることにしよう。

まさにソ連は今、正真正銘の帝国主義的略奪的、餓鬼道的戦争の一方の推進者へと完全にその社会体制の総体をあげてなつていくのか、それとも共産主義運動と社会主義陣営の再統合の戦線の側に必然的に大分解していかざるをえないような道をゆくのかの根本的分岐点にたたされておられ、歴史の教えるところによれば、「反ソ同盟」「反ソ包圍網」に対するさい疑的自己防衛主義を強めてい

けば、彼らは前者の側へと傾斜し、転じきつていかざるをえないのであると。

こうしてわれわれは現情勢下での当面する政治生活にさいして、人民のとるべき態度、その政治基準をさしあたつては次のように示すことができるだろう。

第一に、共産主義運動の歴史的統合を支持する。
第二に、あらゆる反共翼賛主義的（あるいは反ソ的となる場合もある）排外キャンペーンに組みしない。

第三に、現在の自民党政府を廃絶することを伴わない、あらゆる軍備増強、軍事大國化、改憲——越憲策動に反対する。

第四に、帝国主義の政治反動と人民に対する軍事的苦役の強化に抗し、政府に反対するあらゆるたちあらわれと行動を支持し、拡張する。

四、社会主義的生産と所有の本質

——さしせまる転向・挫折文明の破局、それをいかに廃絶するか？

労働者の同志諸君ノ、 勞苦人民、 青年諸君ノ

このように社会主義とは、あるきめられた、おしぎせの型なのではなく、全人民を不斷に共同生産、共同行動へと導き入れ、歴史創造の主体者へ

となるのに邪魔になる資本主義までのあらゆる私利的欲得づくの思潮、排他的けおとし合いをとり除いて、それを歴史創造のための、より高度な団結と統一を闘いとるための協奏競合運動へと

転化し、共同目的のための社会的共同生産へと互いに高め合い、交歓し、止揚する運動形態を通じて全人民を歴史生産者、革命生産階級へと高め上げていくための、前衛的先鋒的組織者の生産単

位、社会的集团的構成体（組織体）のことなのである。

この点からして、今問題となっている転向・挫折とは、なんだろうか？

それは、ある歴史的一時期に、ある形態、やり方を通じて社会主義に接近していった集団、人々が、この社会主義の核心問題をつかみ、組織者としての立場への移行を願いとる前夜で、その転化と移行と飛躍に失敗し、そのことで社会主義を願いとることをあきらめ、社会主義と結びつく回路を自ら失い、歴史の裏舞台へと後退することであり、ここで生じた社会集団内部の矛盾や意見の相違を、協奏競合的的社会運動（共同任務のための共同行動）をもって正しく解決することができずに、相互に自己防衛主義と反発に陥り、組織と運動のいちじるしい分散化と無政府状態を美化し、他の人々がありとあらゆる形態を通じて社会主義と結びつこうとすることを否定しなければ己の地位がなく、己がやってきたこと自身が否定されると感じざるをえない隠微な立場へと自らをおとしこめることである。

資本主義までの私的所有の社会が生み出さざるをえなかった「一般大衆」の無知文明と、この転向挫折文明が結びついていた間（寄食後衛主義の多数支配寄食制度の秩序が保たれていた間）は、社会主義のための活動は、しばしば、社会主義以外の他の生産組織、社会的集团的構成体を、「外

から」破壊することであり、前衛以外の人々や活動を認めず否定することであり、社会主義以外の活動そのものが悪だとすることであるという風にしか、理解されないのが普通である。その前衛活動が厳格で理論的で規律的であればあるほどそうである。

たとえば前衛党員が 労働組員に向かつてこう語ったとしよう。

諸君、今こそ日和見主義指導部と手を切り、プロレタリア組織を結成せよ」と。この前衛党員は、日和見主義の思想的影響をはなれて、その影響下にある多くの人々をねばり強く説得するための活動に入れ」と言っているのであるが、ところが、それを聞いている組員は何を思っているかといえは、もう明日にも組合大会で現執行部の不信任選挙をやり、その場で直ちに組合を脱退して別組織をつくれと言っているのか、それはとてもムチャな話だ」とつぶやきあっているのである。

あるいは、労働者の居住区で、前衛党員が「家族をも社会主義に向かつて組織せよ」と言うと、聞いている本人の方は、女房と離婚して、四畳半のアパートで一人自炊をしながら社会主義を念仏のごとく唱えている自分の姿を思い浮かべるといった具合なのである。

そして転向・挫折の諸君が、顔を真っ赤にして耳もはりさげんばかりの大声で合唱する。マル

青同は集会破壊、組合破壊者だ、カエレノ」と。人民諸君、

このようなわけで、社会主義のための活動、社会主義のための生産や組織（とくに社会主義の国有化など）、前衛による共同行動のよびかけは、よく、私有財産の没収、以前のすべての組織の解体と混同されるのであり、社会主義の説得や教育、批判と自己批判、思想改造等々といったことは、それぞれの人のもつ思想そのものを「没収」し、画一化し、これまでの自分のやってきたことや考えてきたことそのものを否定することとよく混同されるのである。また意識的に混同させるものもいるのである。

こういった文明の手あいは、一昔前までは、社会主義国ではすべて強制没収、国有化だ、強制洗脳だといつてはおそろしがっていたのであるが、ところが社会主義とは、それとは違ったものであるらしいとわかると、今度は大げさにも、社会主義国にも売春婦がいる、自営農地がある、チンピラがいる、汚職がある、マル青同にも不良党員がいるといつては、それらを一挙に絶滅してないといつては、さも「一本とった」つもりになつていたのである。

諸君、どんなに高度に発達した資本主義国家でも、労働組合に労働者が組織される比率は三割を越えないのであり、最も進んだ資本主義統治の思想や国家指導者の政治哲学の下には大衆はほとん

ど組織されてさえないのである。つまり、どんなに文明が発達しても「純粹帝國主義」(世の中は純粹の、生粹の独占資本家と、純粹の生まれながらの革命的労働者階級だけの社会)などというものは生まれようはずがなかったのであつてみれば、その地盤をうけつぎ、これを改造する社会主義にも「純粹社会主義」などというものが一挙に生まれ出てこようはずもないのである。問題はいかに生まれ出た社会主義的要素を拡張し、この下に全国民を引き上げてくる国家政治体制をつくるかだと。

まさにこういつた文明の人達とは、資本主義的国家・生産・所有・政党と、社会主義的国家・生産・所有・政党との根本的差異、資本主義的分業と社会主義的分業の根本的差異に対する無知を自分でひけらかして得意になつていようなものなのである。

そう、まさに、社会主義的所有、生産組織が生まれ、これが他を指導し、その共同行動を組織しても、社会主義協奏競合運動が拡張していつても、ただ一人の「所有者」からただの「没収」するものではなく、どんな組合からも、どんなサークル組織からも、どんな家族もちからも、一つの組合事務所も、一つのサークルボックスも、一人の女房をも、奪つものではない。そこにはなんの変動もない。事実、この活動によつて、過去いかなる前衛外の生産組織や集団が「外から」破壊さ

れたことはない。

では、なにも変えないのでは、いつたいこの協奏運動、社会主義に向かう共同行動には一体、なんの意義があるのか?

それこそは、現在の人民運動の抑止・寸断状態運動と組織のかぎりない、際限のない細分状態のものに寄食し、その分散化と無政府状態の間を渡り歩いて、これを美化し、大衆の無知や、小さなオノレの惑からしか物事を見れない偏狭的排他的思想があつて始めて理性ぶれ、何かやつていづつもりになり、いろいろな運動や人々の転向・背教・敗北主義を賛美し、この無知を基礎にした分散化分断化状態の上にボナパツて始めて、地位をつくり、利益を得ているあらゆる寄食的思潮や活動の奇型的存在の延命の条件そのものが、この活動によつて始めて奪われていくことにあり、このよくな横領的寄食的思潮や組織が除去されることによつて、あらゆる生産組織は、始めて、本来の、生きた行動力を増大させていくことができることにあり、そして、このことによつて始めて、あらゆる人民運動の細流のすべてを一望の下に見わたし、その全勢力を正しく計算し、記帳し、そして、われわれの勢力を正しく全国的に配分し、それによつて、直接にも間接にも、従来までは、自分の小さな組織のことしか考えることのできなかったすべての労苦大衆に、この全行動に理性の力で参加させ、思想を解放し、そうしてわれわれの全勢

力を無駄なく、計画的に、有効に最も貫徹力あるやり方で獲得・動員していくことができるところにこそ、あるのである。そしてこれこそは、現在の寄食的ボナパールの政府の基礎そのものを解体する作業なのであり、そしてこのような共同行動を正しく記帳し統制し、管理する能力こそは、きたるべき社会主義国家を、われわれ自身の力で立派に管理し、運営していくための、その最も基本的な、大切な能力の一つなのである。

だから、この活動は、寄食思潮と転向・挫折文明の激しい公然―隠然たる抵抗と妨害をうけざるをえないが、それこそは、転向・挫折文明と、大衆の無知文明との結びつきが急速に失われていく何よりの兆候なのだということ、多くの被指導大衆はこういつたことを通じて、戦時の理性と行動力をよびおこされていくのだということ、そして、このような闘争を通じてのみ、寄食思潮をも分解させ、本当の職業的ゴロの寄食者と、そうではない、己の敗北と挫折のゆえにそのように一時期ならざるをえなかった、根本上は共產主義的活動と他のあらゆる活動との根本的差異に対する無知によつていられる人々を区分し、そしてこの生産活動によつて必然的に「職を失つていく」人々には、直ちに、大衆の無知の上に寄食し、ふんぞりかえつていた活動から、人民の奉仕者としての、労働奉仕隊としての活動が準備され、与えられていくのである。

労働者諸君、青年諸君、活動家諸君、

このように、戦時の革命的な大衆行動の勃興と培養のためには、あらゆる転向・挫折文明を廃絶し、平定していく必要がある、そしてその必要があるばかりでなく、われわれの間での「共通の言葉」を聞いたことが無条件に必要となってくるのである。

そのためには最低、

第一に、組織者としての活動と他の被組織者としての活動、また組織者としての活動の中で用いられている概念と、被組織者としての活動の中で使われている概念との根本差異を承認し、

第二に、社会主義的国家・生産・所有・戦争および政党活動と、資本主義的国家・生産・所有・戦争および政党活動との根本差異、社会主義的分業や共同行動と、資本主義的分業や「共同行動」との根本差異を承認し、

第三に、真の共産主義的、マルクスの、レーニンの、科学的な帝国主義観—社会主義観と、他のあらゆる修正主義的、左—翼空論的な帝国主義観、社会主義観との根本差異を承認し、

第四に、共産主義的前衛の戦術観や大衆闘争観と、他の非前衛的戦術観や大衆闘争観の根本差異を承認し、

第五に、前衛の組織生活と他の集団の組織生活との根本差異を承認し、

第六に、総じて、共産主義の思想方法—工作方法と他の思潮の思想方法—工作方法との根本差異を承認し、

第七に、共産主義の指導部活動と帝国主義の指導部活動の根本差異を承認し、共産主義の指導部活動に対する旧世界のあらゆる反共的無知ブツケの攻撃、私的所有的偏見からなされる種々の攪乱・分裂攻撃にくみせず、これと一線を画し、闘うということ、等々が必要なのである。

五、党史・共産主義運動の歴史的統合と「社会主義陣営」の構築のため！

労働者の同志諸君！ 労苦人民、青年諸君！

現代共産主義運動とは、まさに多様化し、多様な形態をもって広まっていった社会主義建国の闘いを、統合し、共産主義運動の歴史が生みだしたすべての諸結果に対して責任を負い、そのいかなる「否定的現象」をも、新たな戦場の中で、これまで見たことも聞いたこともないようなり

方で、歴史創造の正道につけ、人々の集団の力をもって、これまでどの革命闘争も突破しえなかつた限界をつき破って、人類を前進させていく力と英知のことである。

共産主義の巨人たちはどんな時でも常にこう言ってきた。

革命はまだ終わらず、さらに継続・発展させ

よ、民衆諸君、一段と文明を高めよ！と。

帝国主義者や寄食者は常に、共産主義の指導部内部の矛盾や差異に割って入り、この団結形態を攻撃することで生きのびんとしてきたのである。

日本の共産主義運動の歴史をとってみるならば、やはりそれも分裂と分解の歴史であるが、ただ明確なことは、歴史を切り開いてきた活動、民衆を

高め上げてきた活動、その先人や同時代人の闘いを否定し、この指導部活動そのものを清算したり、否定したり、黙殺して、己の位置を高めようとした人々は、つまるところ転向・挫折文明の第五列に転じざるをえなかつたのである。

そして、被指導大衆諸君は、この共産主義指導部内部の矛盾・対立・差異とは、どのような形態をとり、どのようなスキヤンダラスな、ゴシップ記事的な詮索で囲まれた場合でも、必ず、理論をめぐる闘争、歴史的な綱領論争をめぐる矛盾、差異としてあるのだということ、どのようにしてこれまでの理論と論争を發展させてゆくのか、したがってどのようなにして、人民を社会主義の側に組織し、共産主義の見地を広め、社会化し、共産主義運動を統合していくのかをめぐる対立としてあるのだということ、正しく知っておき、深く理解しておかなければならない。

逆に、このような綱領論争を、すべての被指導大衆に余さず公開し、その歴史を示し、そこに注目させ、またどのような水準や形態からであろうとも、ここになんらかの形で彼らに参加させることができなかった時に、そしてそれに応じて被指導者の方も、それを正面から扱おうとせず、それを拒否し、別の視角、別の私的自己心情的尺度で共産主義内部や、指導―被指導の関係の問題を見扱うということしかできなかった時に、そのような時に、共産主義の組織的分裂を伴った転向・挫

折が集团的に生まれてきたのである。(日共五〇年分裂、六全協、反スタ分裂、六〇年代後半から七〇年代初頭の分解を見よ)

マル青同的前衛活動とは、共産主義的指導部活動と革命的理論に対する根本的態度を問うことをもって、こうした転向・挫折の基礎そのものを廃絶してきた活動にほかならないのである。

そして今や勃興せんとする新たな戦争と革命の時代の人民運動とは、まさにこの現代共産主義の全理論命題と歴史的綱領論争を、全人民に公開し、これに彼らを多種多様な社会運動の形態をもって参加させ、帝国主義的国家・生産・所有・戦争・政党活動に対する共産主義的記帳と統制の全世界の勝利の時代を幕開く『天地創造』の理性と行動力のルツボと化していくもの以外のなにものでもないのである。

人民諸君！

共産主義運動の歴史と現状に注目し、これに不断に近づき、とらえ、結びつき、共産主義運動の歴史的統合と「社会主義陣営」の再構築を支持し、共産主義の指導部活動を断固、擁護せよ！

—以下、略—

発行日——一九八〇年十一月二十七日
編集・発行——マルクス主義青年同盟
発行所——党 旗 社

東京都墨田区亀沢三一二七—三

マル青同 中央本部

電話番号 ○三(六二四)二四八一

郵便番号 一三〇

振替 東京 一九〇七八四

カンパ送り先

第一勧業銀行亀戸支店

(普) 一六五二七三九

永井 弘

〔関西地区事務所〕

電話番号 ○六(三四九)二三五四